

# 果樹・野菜も影響

農水省が  
レポート

## トマト着花・着果不良 全国面積の4～5割に

は、裂果が4～5割、  
焼け果、生育不良がそれ  
ぞれ3～4割みられた。  
対応策では、着花・着  
果不良、生育不良、裂果  
の発生などで遮光（遮  
熱）資材の設置が挙げら  
れた。

農水省は、2025年の「地球温暖化影響調査  
レポート（速報）」を公表した。速報版として、  
各都道府県から影響の発生が多く報告されている  
農畜産物で、地球温暖化の影響や最も効果のあつ  
た対応策などを取りまとめた。果樹・野菜では、  
リンゴで花芽分化期、開花期の高温による着果不  
良が発生し、発生割合は全国栽培面積の4～5割  
に及んだ。また、トマトも着花・着果不良の発生  
が4～5割にのぼった。

実肥大期から収穫期の高  
温または高温・少雨によ  
る着色不良・遅延が発  
生。さらに、日焼け果が  
3～4割、浮皮が2～3  
割みられた。

### 【イチゴ】

育苗期から花芽分化期  
の高温で、花芽分化の遅  
れが発生。西日本で7～  
8割、東日本で4～5  
割、北日本で3～4割影  
響がみられた。また、西  
日本では栽培期間中の高  
温または高温・少雨によ  
る虫害の発生や、育苗期  
から開花期の高温または  
高温・多雨による病害の  
発生がそれぞれ2～3割  
みられた。

わが国における、20  
25年の年平均気温偏差

1991年～2020  
年までの年平均からの  
差は、プラス1・23℃  
で、1998年の統計開  
始以降3番目に高い水準  
となった。ただ、6月～  
8月でみるとプラス2・  
36℃で、最も高い値を記  
録している。

レポートは、農業生産  
現場での地球温暖化が要  
因と考えられる影響と、  
各県で最も効果があつた  
と挙げた対応策等を取り  
まとめたもの。果樹・野  
菜の主な品目における影  
響の発生状況、対応策は  
以下の通り。

【りんご】  
北日本では、栽培面積  
の6～7割で花芽分化期  
および開花期の高温によ  
る着果不良が発生。ま  
た、3～4割で果実の肥  
大不足もみられた。一  
方、東日本では、果実肥

大期～収穫期の高温によ  
る着色不良・着色遅延、  
春先の凍霜害がともに6  
～7割、日焼け果が5～  
6割発生した。  
対応策は、着色不良・  
着色遅延に対して品種・  
系統の転換、肥大不足に  
はかん水の実施、虫害に  
は交信かく乱などが挙げ  
られた。

### 【ブドウ】

全国的に果実肥大大期～  
収穫期の高温または高  
温・少雨による着色不  
良・着色遅延が発生。西  
日本では4～5割、北日  
本3～4割、東日本で2  
～3割みられた。さら  
に、東日本では2～3割  
で日焼け果も発生した。  
着色不良・遅延に対す  
る対応策として、枝や幹  
の樹皮を輪状に剥き、養  
分の流れを調整する「環  
状剥皮」や、黄緑系品種  
への転換などが挙げら  
れた。

### 【トマト（ミニトマト を含む）】

生育期から収穫期の高  
温による着花・着果不良  
が全国的に発生。西日本  
で5～6割、北日本およ  
び東日本で3～4割にの  
ぼった。また、西日本で

対応策では、花芽分化  
の遅れにはヒートポンプ  
夜冷、育苗期の株冷却の  
実施、紙ポットでの育苗  
が挙げられた。